二〇一八年三月二日

御点前の所作のごと掬む春の水　せいじ
花がらを摘めばパンジー唄ひだす　明日香
春一番放牧場に牛居らず　なつき
沖遠く失せる巨船や春霞　せいじ
糶負けて紫煙くゆらせ春愁ふ　さつき

二〇一八年三月一日

子午線はどのへんかしら海おぼろ　うつぎ
宍道湖で穫れし蜆と幟立つ　智恵子
盆梅展琴のしらべに巡りけり　はく子
春一番合格電報届きたる　菜々
子午線と記すホームや駅うらら　たか子
水仙の香にうち仰ぐなぞへかな　みどり
春愁や即絞めらるる糶の魚　せいじ
竹林のいまし修羅場や春疾風　三刀

二〇一八年二月二八日

春潮にたゆたふごとし淡路島　たか子
雛の間和服姿の碧眼も　よし女
潮騒を背に磴のぼる遍路かな　なつき
時々はスイッチ入るる春炬燵　こすもす
春光に反る白銀は大架橋　せいじ
人垣は初いかなごや魚の棚　うつぎ
風鐸の揺れ落ちつかず涅槃西風　宏虎
目高鉢時化さながらや春疾風　よし女
子午線のトンボ標柱風光る　はるよ

二〇一八年二月二七日

湯煙の立ち登りたる冬木立　愛正
刀傷のこる茶室に雛御殿　なつき
子午線の空に輪を描く春の鳶　ぽんこ
春水をざぶざぶ使ひ糶果つる　たか子
亡き母の所作思ひつつ雛飾る　もとこ

二〇一八年二月二六日

おらが山今朝は霞に隠れけり　三刀
目瞑りて聞くせせらぎの春の唄　みどり
堂ぬくし碧眼の徒も写経せる　せいじ
ゆつくりと向き変ふ鯉や水温む　みどり
春耕の畝黒と縞なせる　明日香

二〇一八年二月二五日

肚割られ透きとほりたる干鰈　宏虎
ほつほつと漁火点る春の宵　はく子
豆の咲く岬に展け海まさを　やよい
春耕といふも一畝庭畑　菜々
風光る大願塔の水煙に　たか子

二〇一八年二月二四日

風花の磴百段に高舞へる　みどり
春泥を蹴つて仔牛を見に走る　なつき
オルガンの響き聖堂冴返る　はく子
春昼やふつふつケーキ焼ける音　みどり
丘の上の聖十字架に風光る　満天
早立ちの渡船に並ぶ島遍路　なつき

毎日句会みのる選・二〇一八年三月四日